高知の医療・福祉を考える

福祉への提言

医療法人山本会理事長　山本浩志氏
救急病院 南国中央病院
老人保健施設「夢の里」
訪問看護ステーション「南国」
在宅介護支援センター「まほろば」
ボランティア「命のペンダント」

山本 浩志氏

わが国は高齢社会を迎え、要介護老人の数が増し、医療のみならず福祉の重要性が言われています。そこで今回、老人保健施設「夢の里」、訪問看護ステーション「南国」などを運営されている、南国中央病院長山本浩志氏に、福祉についての考えをうかがいました。

戦後の福祉の歴史と今後の福祉のあり方

――日本の戦後の福祉の成り立ちはどのようなものでしょうか。またこれからの福祉はどうなるのか、あるいは先生が考えている福祉のあるべき姿について教えてください。

現在のような日本の医療、福祉の原型ができたのは、昭和40年代後半からです。昭和40年代になると日本も経済的に発展し、先進国の仲間入りを果たしましたが、同時に経済成長に伴うひずみが起きてきました。環境問題(公害)もそうですが、日本は経済の発展の割には、福祉や年金制度が遅れているということで、国も本格的に福祉国家の建設を目指しました。

モデルとしたのは、イギリスやスウェーデンなどの西欧型福祉国家でした。しかしその計画は当初より、雲行きがあやしく、昭和46年のドル・ショック、昭和48年のオイル・ショックを契機に、徐々に高福祉、高保障の西欧型福祉国家が批判され、そこで提唱されたのが、現在の医療、福祉の原型となる日本型福祉国家の建設です。その基本となるのは、①受益者負担の原則　②自立、相互扶助　③公助抑制(民間活力導入)の3本柱でした。

これを平たく言えば「国はこれからは医療や福祉の予算を減らしていきます。医療や福祉を受ける人は、それなりの負担をしてください。また老人は自立し、お互い助け合って生活してください」というものです。

この流れを受けて、昭和58年には老人医療費の一部負担、昭和59年には、健康保険の被保険者の一割負担が導入されました。昭和60年には、老齢年金制度が大幅に改正されましたし、最近では、老人病院における定額医療や給食費の有料化が行われています。また昨年からは介護保険の導入について議論されるといった具合です。

――これからは医療にしろ福祉にしろ、大変な時代になっていくということですね。

それは間違いないと思います。その中でわれわれが福祉について考えなければならないことは、①いかに多くの人によりよい福祉を提供できるか　②いかに安く福祉を行えるかの2点だと思います。

ただ少し批判めいたことを言えば、多くの福祉に関する本や講演会の内容は、①の点ばかりに焦点が注がれているように思われます。

しかし福祉といえども限られた予算や人数の中でしかできないので、私は②の点で福祉を考えることも大切だと思います。つまりこれくらいの予算、これくらいの人数でできる最高の福祉は何かというように、具体的に考えることです。あるいは、福祉のあるべき姿を提唱する場合は、それを実行するには、どのくらいの予算と人数が必要かも同時に提示する習慣も大切でしょう。

「理想は走り、現実は歩く」ということわざがありますが、人はこうあってほしいとか、こうあるべきだという期待とか願望に弱いものです。福祉についても現状に対する認識がなければ、どうしても甘くなり、理想論に流れやすくなると思います。

老人の自立と生きがい その言葉の意味と時代背景

――ところで国の福祉の予算が削られてくると、老人にとっても、自らが自立し、生きがいを持つということが重要というより、そうせざるを得なくなってくるということですね。

確かにそうだと思います。しかし社会が老人に「自立」とか、「生きがい」を求める時代とは、どういう時代かを考えることも大切だと思います。

実際、昭和30年代前半までは、老人の自立とか生きがいという言葉が使われることはほとんどありませんでした。当時は老人の自立も容易で、生きがいも簡単に持てる時代だったからです。だからそれらの言葉は必要ありませんでした。

しかし昭和30年代後半になると、高度経済成長の煽(あおり)を受けて、非生産集団の老人は徐々に追いやられ、自立し、生きがいを持つことが難しくなりました。その心の空洞を埋めるために、アメリカから自立という概念が導入され、生きがい論も強調されるようになってきたのです。

言葉は、その言葉自体が意味するところより、その言葉がつくられ、語られる時代背景が実は重要だということはあります。

それを象徴する言葉は「敬老」だと思います。9月15日は敬老の日ですが、実は昭和40年までは老人の日でした。昭和41年より敬老の日に変わったのです。老人という主体から人々から敬われる客体に変わったのです。高齢社会を長寿社会と呼ぶのも同じ発想です。なぜそう変わったかを考えることも重要でしょうね。

――老人の自立とか生きがいとは、具体的にどういうことを指すのでしょうか。それは言葉としては理解できても、実際どう行うかとなると、はっきりしない点も多いようですね。

まさにその点だと思います。言葉だけが独り歩きし、内容が伴わない、そんな印象を受けます。

自立という概念はアメリカから導入されたと言いましたが、アメリカ社会における自立とは、人に頼らない、人に依存しないという、一個の独立した人間を単位とする社会です。一方日本では、人に頼らないというより、人に迷惑をかけないという、集団社会の中における一個人という色彩が強いと思います。それだけ個人としての自立は弱いものです。

もちろんこの背景には、アメリカ人は個人を重んじるプロテスタントの宗教観がありますし、日本人は、集団社会を重視する神道の教えが根底にあります。

これらの点をまったく考慮に入れず、自立という言葉だけに捉われるなら、自立とは自分のことは自分でするという意味以上のものではなくなってしまうでしょう。そこに社会性や福祉の思想というものを重ねることはできなくなります。

生きがいについても同じです。これは木下康仁氏より学んだ点ですが、日本人は生きがいだけではなく、やりがいとか死にがいという「……がい」という言葉が好きだそうです。好きということは、こうした言葉が一種の心情語になっているということです。生きがいとはどういう意味の言葉かという論理的な側面が省略され、生きがいの対象をめぐる問題にすり代わっているということです。老人の生きがいは、クラブ活動、スポーツ、趣味、テレビ、孫の世話等というようにです。

――老人の自立とか生きがいに限らず、これからの高齢社会を考える上で、先生は何が一番大切だと思っていますか。

私は言葉の解釈の問題というより、老人がそれゆえに追いやられた「老い」の何かが分かっていないことが問題だと思っています。老いの研究もほとんどありません。老いは受け入れるべきか、拒否すべきかも分かっていません。そこに哲学も思想もないことが問題です。

ただ高齢社会を追いかけるような、言葉の政策しかとれず本質が見えないのです。この点をわれわれは真剣に考えていくべきだと思います。特に高知県は高齢社会の先進県ですので、わが国の高齢社会のパイオニアとして、実験的試みをする勇気と決断が行政に望まれます。その際、なぜ高齢先進県になったかの反省と分析が根底になければ、私はかけ声だけで終わると思っています。

福祉の限界、幸せの限界
(高齢者の生活意識調査を通して)

――高齢社会における、福祉のあり方についてどのようにお考えですか。

私は福祉を考える場合、常に福祉の限界を考えます。福祉の「福」も「祉」もさいわいの意、すなわち幸福(幸せ)に通じるものです。

しかし私は福祉はその意に反して、人に幸せを与えるものではない、あるいは人に幸せを与えることはできないと思っています。それを一つの調査から感じました。

これは3年前に行った南国市の65歳以上の高齢者を対象にした生活意識調査です。その中で不幸と感じる人を詳しく調べてみますと、多くの場合、健康でない、お金がない、家族がない、趣味がない、生きがいがない、というように、自分に「ない」ものを考えて生じているようです。しかもこの不幸感を強くしたり、弱くしたりするのは、現在の自分が、(イ)過去の自分に比べてどうか、(ロ)まわりの人に比べてどうかという比較であり、特にまわりの人に比べての自分の置かれている立場や状況が強く影響をおよぼしているようでした。

一方幸せを感じる意識(幸福感)は、健康である、お金がある、家族があるというように、「ある」ということで得られるかといえば、それだけでは不十分のようです。人は自分にあるものは当然と思いやすいし、それに慣れるということで、持続的な幸福感に結びつかないことも多いからです。その意味では幸福感と不幸感は同一次元ではなく、幸福感はよりぜいたくでやっかいな代物といえます。もっとも自分に「ある」ものだけで満足し、それが幸福感に結びつく人もいますが、それは理屈というより、その人の性格に負うところが大きいようです。

では人に幸福感を与えるもの、すなわちプラスアルファとなるものは何かと言うと、それはその人の生きるあかしというか、生きている実感というか、生きる上での情熱とか使命感というか、別の言葉で言えば、生きがいとかやりがいというものになるかもしれません。しかも、それは他から与えられるというよりは、自分が見つけ、つくりだすもので、そこに本人の主体性とか創造性が要求されるようです。

しかもその対象となるものも、個人的な趣味から、公的な社会活動に至るまで広範囲にわたりますが、そこに共通しているのは、まず目的意識を持ち、それに挑戦し、それを達成し、しかもそれを評価されるという一連の行動原理のようです。特に評価ということも大切で、正当な評価のないところでは、生きがいも幸福感も生まれづらいと言えます。そういう調査結果でした。

――その調査は、「人に幸せを与えることは難しい」ということを物語っているのでしょうか。

その通りだと思います。幸せになるには、それになるだけの目的や努力はやはり必要でしょうし、それは人に与えられるというより、自分でつくりだす性質のものですからね。その人の責任という一面はあります。

だから私は、福祉というものは、人に幸せを与えるというより、不幸の立場の人を少しでも少なくするということを主眼に置くべきだと思っています。多くの人に幸せを与えようとすると無理がいき、与える側がヘトヘトになる恐れがあります。ここは割り切って考えてよいと思います。

「幸せは自分でつくってください。そのための土台づくりはしますから」と。

福祉のネットワークを目指して 地方行政の責任と役割

――行政改革とか地方分権が叫ばれていますが、この点は福祉にどういう影響を与えるのでしょうか。

その影響は大きいと思います。権限や予算の決定権が国から県や市町村におりてくると、市町村もその地域にあった独自の対応策や戦略が求められます。それだけ責任が重くなるということで、福祉も例外ではありません。

ただ福祉といっても、やはり福祉だけが健全であるということはありません。医療や福祉、それに上下水道などの社会資本は、人間の体でいえば静脈にあたる部分です。心臓や動脈にあたる部分は産業や教育で、それがしっかりしていなければ医療、福祉も健全でありえないでしょう。

それにこの点は大切だと思いますが、地方の時代とか地域おこし、町おこしといっても、多くの市町村ではそれに対応できず、過疎化がますます深刻な問題となると思います。つまり活性化されず寂(さび)れていく地域が実際は多いのです。

そこで取り残された人々がどう生きるか、何を喜びや幸せの糧として生きるかが問われると思います。そういう中では、そこに住む地域の人々は、共に手を取りあって生きていく以外方法はないでしょう。ただそれはあきらめというより、自らの欲望を少なくし、他人との協調の中で、新しい人間関係を築くという積極的なものであってほしいと思います。そういうシステムづくり、福祉のネットワークづくりというものを、行政が中心になって考えていくべきでしょう。その際、次の点は明確にしておく必要があると思います。

①行政が個人(住民)に対して、何ができるか、何ができないかの限界を示すこと。

②個人の自由と権利をどこまで保障するか、あるいは制限するか。

③個人が行政や地域社会に対して、何を義務として負うか。

これらの点をはっきりさせておくことが必要です。福祉社会というものは、ある程度、個人の自由や権利を制限しないと成りたちませんし、逆に自由と競争の社会では、どうしても福祉がおろそかにされる恐れもあります。その兼ね合いというか、枠組みづくりが必要でしょう。その上でこそ、福祉の適応と限界ということも論じることが可能となるでしょう。

――最後に何かつけ加えることはありませんか。これからの医療、福祉への提言のようなものがあればまとめてください。

社会の成熟度や、人間の進歩をはかるものさしは、弱い立場の人が社会でどう扱われるかによって決まると言われています。ほんとうに物が豊かになって、弱者にも目を向ける余裕ができた、そういう時代に生きていることは素晴らしいと思います。

ただそうなったのは、科学や文明が進歩したおかげで、それは人間に欲望や好奇心があったからだと思います。また自由や競争の中でやってきたという面もあるでしょう。

しかし福祉というものは、本質的には競争というより、人々の協調とか和の中にあります。富や権力を得るというより、それを分け与えることに喜びを持てるかどうかだと思います。つまり欲望の深さではなく、心の広さです。それが福祉の原点かもしれません。

しかし、それは決して簡単ではありません。

ある意味で人間改革であり革命です。もしかしたら不可能かもしれません。というのも、人間は、情熱は資本主義(自由主義)で、心は社会主義でというようには簡単にいかないからです。だから難しいのです。

しかしそれは一つの挑戦だと思っていますので、そういう気持ちをもって医療、福祉を行っていきたいと思います。

どうもありがとうございました。

インタビュアー
森田　真由美さん
(RKC高知放送リポーター)

「幸せは自分でつくってください。そのための土台づくりはしますから」

企面・制作／高知新聞社広告局

㈱キタムラメディカル
㈱シーメック
㈲昭和メディカル
有限会社マツダ興産
㈲西森建築設計事務所
高知市洞ケ島町2-7 ☎(0888)74-4640
㈲シー・エム・エス・里の会
四国医療サービス㈱
高知第一薬品㈱
土佐ガス株式会社
清水建設株式会社
四国支店／高松市寿町2丁目4-5 ☎(0878)39-4300㈹